

「過程」を視ること——火星と御月様の舞いの春にちなんで——

マルクス・リュッターマン

執筆依頼の締め切りに向かっている四月、西にして大枝の奥斜面の地に片栗の花が反り、南にして夕空の木星と火星と月が舞芸を披露した。みごとに、再生する弥生の植物や赤い光の目と白く満ちた光の面が小さい人間の考えを導き、随筆の題材でも暗示しているかのように微笑み乍ら見下ろしてくれた。

私は今年度から日文研の文化資料企画室の仕事に携わるように頼まれ、職員と研究者の皆様と一緒に資料の公開方法やそれにかかわる技術的な要素（機械、ソフトウェア）と戦略を回想して参りたく、世の中で有力になったインターネットやIT産業による恵みの光と依存の影の間の当たりになっている。正直申し上げると、地球各所で同時に同様な研究対象をめぐって分析と解釈を繰り返す可能性に憧れる多くの人文科学者のように、小生もITは便利に活用したくても、最新技術の形態によって人間思考の自由と時間を奪いがちな一面の傾向は憚る。しかしながら、両域の依存関係は瞭然であり、研究所の仕組みには相互理解、尊重、保護が不可欠である。今後、広くまたは長期的な資料公開の底力を発揮するには、最新の情報技術を採用しながら無常の世が動いている過程に対応しなければならぬ。一方、IT技術に信頼できない人々も声をあげて、とりわけ人間ならではの連想力、倫理、意識と言語による思考を中心に先述の過程への対応を求めている。たとえば、このごろの翻訳ソフトウェアは数式的に描く範囲

では機能しても、人間言語、即ち文化の世界では不十分なばかりではなく、誤解と不和さえ招きかねない。

やはり、思いおこすに、古代ギリシヤ学問には二本の大柱が聳えている。研究者の間にプラトンの洞窟比喩を以て語られる「影」の認識論はその一本で、二本目はアリストテレスのアルケー（根源）をめぐる考察、これもまた動因論として知名度のもっとも高いものである。この両論はおそらくギリシヤ哲学の固有の産物ではなく、それに相当・類似する世界思想は萬あれども、先ずは原理的にこの二つ、想像と実像との関係及び要因と万物の根源との関係が人間の認識論ですぐれて注目されている。それでは、洞窟のお話と始動因のお話の関連について考えてみよう。

洞窟の比喩は、壁面に映る「影」が「事実そのもの」と見受けられる人間の日常的錯覚が主張される例え話である（『国家』第七卷）。影の芝居は背後にある別物によって動かされ、しかもそのアイデアを振り返ることのできない、縛られた人間の五感では見えない、という古代のメディア批判として解釈される。このごろ動画や絵画資料など、視覚で観察したからといって、「分かった」・「理解」と勘違いする短期性及び利那が蔓延しているが、勿論その「影」で準えるものは視覚的な観測にとどまらない。ソクラテス／プラトンが表面の裏に潜む徹底的なアイデア追求を知の境地といい、現在でいう「研究」が時空を超え、非物体的な・永遠の実在を探ろうとすることは通念であろう。文化を対象とする研究所もまた、このような理念をもてば、自然科学の本質と違わず、いわば肉眼ではいたらない、考察的な究めが期待される。

アリストテレスの形而上と訳される概念はじつは「上」というより、自然の諸存在を論じた「後」、若しくは「存在中」のものという意味であるが（『形而上学』第五卷第一章）、その議論

では移り変わる諸存在の動因、この世の作用しあう様をひろく説くところである。そしてアリストテレスは作用の動因を視るに、「始動因」があり、始動自体は非動的な性質をもっている。と提唱する。

この世の場所および時間を究める認識には「影」的作用と「始動因」に遡ると理解される作用とが後ほど一神教のユダヤ、キリスト、イスラムの各教理に影響したが、信仰の習合以前に立ち返ってみればすっきりするかも知れない。いずれにしても、「始動因」を追っても、宇宙の形成学から動物の進化学までその始めは見えてこないし、その目的地も見えない。歴史学者のドロイゼンがその『史学綱要』で、歴史学問は中途の連鎖しか把握しきれないのであると述べたように、作用から作用へと分析や解剖や解剖を繰り返すその業こそ研究という意味である。

肉眼で見えない種を見いだしてひらめくこと。見えない原動力を発見してこの世のひと齣でも理解すること。移り変わりの因果関係の一部、輪廻の一連を視野にいれること。認識論はこの識別に尽きると思われる。物理学でさえ、物質及びエネルギーというモデルをもって起動原理をのべつつも、その物質とエネルギーの間のもも導入し（たとえば光子）、しかしそもそも物質やエネルギーが何であるかは説明できない。言葉と想像を越える世界のようにあるが、見えない、一目では納得できない因果関係の地下流の一部分を解明し、見えるかの様に置き換えてみることを学問は目指しているのである。

宇宙の現在を知るには物質やエネルギー、陽子・中性子・電子をはじめとする某子、波及び線と呼ばれるものの成り立ちが研究されている。その発展上の形跡として視覚の範囲内外の宇宙にして光線、大気にして音が観測され、その波の長短によって物理学的に時間及び空間の拡大と入り交じり（歪み）が推測されている。物質に関しては、その構成の複雑さによって元素

表のコードで列記される積み重ねが露になり、星形成そのものもたらしめた物質が地球やその他の惑星の素材をはじめ、生物体内の鉄などに至るまで基礎素材となったことも知られている。地球ではまた、地層分析によって地球の天体としての成り立ちや地殻・気候の変容などが分かる。しかも、石炭・石油のように、過去の生命放射性の印が点在する場合には、炭素14比率、つまり半減期が五七三〇年であることをもって著明なC14年代測定もできる。生命の発展を把握するにあたって、遺物やその細菌などによる浸食と刻印を手がかりにして、形態的な分析を通じて、細胞、骨、四肢、羽、脳などのいわゆる進化が判明している。また、肉眼で見える形のもととなるコードは遺伝に刻まれ、気候と環境による変化に対応してきた過程が読み取れる。同様に、対面して交際する個人等も、その目の奥、その額の裏に来歴が記されている。大学生の生活、小中学校、高等学校の教育、竹馬や砂場の幼い頃に、母親の胎内に心の育成が遡るように、個人を知るにはその人の過去を解明しなければ、理解に繋がらない。教養や育成の分析と同様、治療も病歴の纏めから始まる。我々は対象がいかなるものであっても、原形を把握し、何等かの問いを掛けようとすれば、その背景知識として過去を調べる。個人のように集団もその過去には健全らしい要素と危惧を抱かせる要素とがあり、それらが現在に至る有様を文化という。現在の苦痛から脱皮せんと信仰や、冥想に期待する向きもあれば、文化学問に手がかりを求める動きもある。しかし念のために、学問は智慧や悟りの醍醐を保証せず、単に合理的な言葉による認識主張を矛盾のないように調和させようとする学識拡大プロセスであることを忘れてはならない。

中国語の概念を受けて、日本でも一般的にそのような背景を歴史といい、官僚（史）が記す年月という言葉を使うが、現代の歴史概念では学者が遺物を分析（解読と解釈）する作業をひ

ろく含むと言ってよい。現代の歴史概念には二つの特徴があることを注目したい。一つには、史料（遺物）として文字の言葉が伝わる時代のみが歴史と言われ、それ以前はいわゆる先史に過ぎないという見解である。すなわち人間には史とその先とがあるという。これは依然として有力な見方であるが、果たして有効な考察様式であるかは疑問である。もう一つの特徴はその人間を中心とする対象（人文科学）であるが、その相対化をめぐる議論の余地も甚だある感がある。歴史研究の対象として果たして人間にさほどの霊長らしい玉座を与えるべきなのか、それもまた八方で問い直されかけている。

しかし、学識の主体はとりもなおさず人間・人類の研究者達である。また、その主体の歴史を語る資料Ⅱ史料は儀礼、神話、衣食住などはあれども、そのいずれの意味についても遙かに細かい資料Ⅱ史料として言葉がある。言葉は心理の媒体であり、それが汲んできた過去の流れには豊富な情報が伝承されている。言葉を史的に研究する方法は多彩にあるが、いわゆる歴史学として定着している学問の独占ではない。医学、天文学などの自然科学、文学、言語学にはそれぞれの史的研究が認められる。私の意見では、それらを総合的に考察する研究が一般歴史学Ⅱ文化史学の役目である。文字が伝存されない場合、史的对象に欠けるということを理由に、言葉そのものが「史料」として歴史学から排除されそうだが、実は地名、人名、普通名詞、動詞、文法を「史料」にして、その構造的、復元的方法によって特定の問いへ特定の答えが可能になる。例えば、「神」という言葉の原意は後述の騎馬民族がもたらしたいわゆるアルタイ語系統の「シャーマンの聖職者」から変遷したように。

周知のように、雅楽では箏篋をはじめ、遊牧民の生活基盤に由来する楽器が登場する。高床式の建設は漁業生活を基盤とし、稲作農法と混ざって中国の南端から北上した。越國などの山

東半島周辺で稲作とともに蕎麦・麦の農作や玉石文化、養蚕業や北部の遊牧など多彩な民族に伝わる漁法や捕獲や農法と家畜の伝統が朝鮮半島に移動して、日本列島の主たる文化基盤の一つをなし、そしてさらに南下する騎馬民族の影響を受け、朝鮮半島と日本でその支配層の言葉がもう一つの文化基盤をなした。大まかにこのような民族混交を出発点にして、さらにアイヌ文化及び蝦夷の合成文化をはじめ、北方の肅慎（みしはせ）と南方の隼人という移民とが合流して日本文化が形成されてきた過去に、或は宗教思想或は生活道具、或は神話或は衣食住、或は言葉或は文字が多岐にわたって過去の源流に遡る。

贅言を費やしているとも思われよう。しかしこれらの史実はヨーロッパなどではあまりひろく知られていない。一因は西洋史以外の歴史に対する鈍感さ、また一つは西洋文化圏外の記号との深い隔絶感である。太平洋から北極圏まで相互の認識が鈍いのが普遍的だが、集団的自意識が不十分である事実とも絡み合っている。しかし実は今やそれぞれの文化の担い手は普く地球人間社会が主体で、同一の主体であるとの自覚が要請されているのだ。例えば、西洋人のみた日本史、日本人のみた西洋史といった古めかしい見方は、文化学専門家としての見方に変遷しつつある。いわゆる中近東から東西に分布した伝播が蛇行のあげくまた合流して大海になった現在。中国から東西に伝播したのも大海の共有物と化している。

そこで、史料を深く読む能力、比較を通じて人類史の遺産として位置づける資格、それを共有化させる役目は国籍を問わない。ところが、認識や考察を運ぶ言葉は未だそれぞれの別の言語圏に分かれている限り、その間で専門的な文化翻訳が必要である。研究者はこのような文化翻訳をふくめた仕事を果たしており、例えば、いわゆる日本学者もこの類に所属している。しかし、同時に日本の出版市場向けの作品も他言語に訳されている。こうした場合には、翻訳の

専門性に向けて、忠実性以外にいくつかの注意点がある。三点でもって纏めてみたい。

(い) 翻訳される言語圏における研究史(論文・単行書)に配慮して、それに対応して論ずる能力。たとえば鎌倉・室町時代の武家研究や法政史など、日本語史における万葉仮名における漢音の影響や、音便の変遷、偽物語りのようなパロディ文学などについていえば、案外に知られていない既往文献が存在している。このような文献は当該言語圏の研究者の間でも無視・軽視される可能性もあり、短期の滞在では研究史の全体像を到底掴めない。このような背景を無視して、日本語で出版された研究書を翻訳しようとしても、相互理解に至り難いばかりか、誤解の種にさえなりうる。概ね当該言語圏中の研究事情に応じた解説がのぞましい。

(ろ) 当該言語圏そのものの概念史、歴史用語、言語や暮らしの伝統を充分把握しないまま、日本の事情をのべる際、研究対象の特殊性、異質性が強調されすぎる恐れがある。例えば怨霊という言葉と概念とは欧州では知られていないというような主張。当該言語圏の研究者の間でさえ自ずからの概念伝承に疎いことからそれを無視・軽視することがある。それもまたその議論様式の高貴さ、分析の気鋭、学識の権威につながり、翻訳語の水準に反影している。

(は) 当該言語圏には固有な問題関心、関心構造、感性があり、また、知識未発達の域も、認識度の高い域もあるので、その有様への批判も含めて、対応する必然がある。

以上三点が学問的な公開法・伝達法の不可欠な要点である。即ち、各国の言語には日本文化を含めた人類史に関する洞窟壁面の「影」やアルケー(根源)の追求が共同に担われている。現在と未来は今こそ共同のものだからである。そこで現在、たとえば「日本側」と定義し(果たして一色の集団を指しうるかはさておく)、自己満足や自己への先入観、もしくは反省的思考も含めた自己認識と「自己理解」をも「発信」(ミッション)する仕事を我が役目や使命と

設定して、かかる各国における伝達法が果たされるだろうか。某社会、某文化における作用が解明される考察が個別の利害・私観にねづく「知ってほしい」という外交的な作業でいいのか。むしろ、インターネットにおいてこそ内外の壁を崩して、人類は共同に「知りたい」という認識論の上で意義をもっているという考えが研究者としての妥当な見解であろうか。日文研もその文化資料研究企画室をはじめ、資料公開と解釈をミッションに託すと言うよりはあくまでも控えめに「提供」すると言えば、姿が芳しく、響きもいいのではないか。人間社会がグローバルに入り組んで変化しつつある中で、その相互理解に努める学問は既に何百年の貢献をのこしている。各国に日本発祥の文化が世界的遺産として伝承されており、日本学者が歴史関係で日本語や英語を傍らに、フランス語、中国語などで論文や研究書を書いているなかで、当該語圏の概念や既往研究に配慮した執筆法をとることを通じて、その環境に応じて、その環境で尊崇しうる形にして日本語文化千五百年から出る答えを紹介している。こうして世の中全体の相対化と視野拡大に資している。

大枝の空の上で軌道を交差する天体を視れば視るほど、たとえ刹那に世上の注目を引かずとも知識人としての議論をもって新しい人類史認識を生み出す可能性に力を注ぎ、国際的な「過程」を見きわめる日文研の行方が期待されてならない。

(国際日本文化研究センター准教授)